

岩手県内における看護活動の充実と普及に関する研究

研究 2：岩手県の災害復興に関する看護技術に関する研究

菊池和子、武田利明、高橋和眞（以上、教授）、似鳥徹、平野昭彦、井上都之、高橋有里（以上、准教授）、三浦奈都子（講師）、鈴木美代子（助教）、以上、岩手県立大学看護学部

<要旨>

東日本大震災の被災者支援チームと協働し、盛岡地域へ避難している方のサークル活動に出向き健康相談を実施した。慢性疾患をもっている方が多く、定期的な受診と服薬行動を継続し、経過を観察していく必要があることを利用者と共有した。震災による心の傷は深く大きいことを語る方もあり、解決に要する「時間」の長さは個別であり個人差があることを念頭に入れて支援していく必要がある。

1 研究の概要

平成 23 年に発生した東日本大震災によって大きな被害を受けた沿岸地域の被災者が被害の少なかった盛岡地域に避難し子供との同居や民間アパートのみなし仮設で生活をしている。また約 700 世帯の被災者が盛岡地域で避難生活を続けている。被災者支援チームである一般社団法人 SAVE IWATE は盛岡市の委託を受けて盛岡地域で避難生活を続けている被災者への活動の中のひとつとして被災者に雑巾を縫ってもらい、毎月 2 回それを持参してもらっている。その際“お茶っこ飲み会”を開催し被災者との語らいの場を提供している。

基礎看護学講座では SAVE IWATE と協働し、“お茶っこ飲み会”に参加している被災者へ医療職の立場から健康面からの支援として血圧測定と健康相談を平成 24 年から継続している。

2 実施内容

平成 28 年度は岩手県公会堂において“お茶っこ飲み会”が開催され、健康相談は計 2 回実施した。利用者は 2 月 4 名、3 月 7 名で計 11 名であった。全員が女性で 65 歳以上の高齢者であった。雑巾を縫い語らいの場に来るのを楽しみにしていると話す方が多かった。それぞれ慢性疾患をもっていた。体の変調があるにもかかわらず主治医に遠慮して体調について相談できない方がいたが、次の受診ではそのことを話せるように支援した。また被災後 6 年目になって辛い時があると話をされた方には、体験を傾聴し、症状が辛い時は受診するように助言した。

3 これまで得られた研究の成果

“お茶っこ飲み会”に参加している人は高齢者が多く以前から高血圧などの生活習慣病の方が多かった。ほとんどの方は受診し治療を継続していた。盛岡に来てから体重の増減があり、普段受診している主治医に体の変調があっても相談できない方もいることから医療者の健康相談が求められていた。

転居により馴染みの近所づきあいができなくなったために会に来るのを楽しみにしており、このような交流の機会が孤立と生活不活発病を防ぐために必要であると考

えられる。

被災後 6 年目になって辛い思いが出てきた方がいた。被災直後に辛い思いをしていたが年月を経るにしたがって和らいでいく人がいる一方でそうではない人もいます。震災による心の傷が癒える過程は様々で個人差があることを念頭に入れて支援していく必要がある。



図 1：血圧測定をしている場面



図 2：健康相談をしている場面

4 今後の具体的な展開

利用者の方と話していると話を聞いてほしいという気持ちを感じられた。発災から 6 年経過して辛くなったという方もいたように受け止め方には個人差が大きい。これからも支援を継続していく予定である。